



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Monday 14 May 2007 (morning)
Lundi 14 mai 2007 (matin)
Lunes 14 de mayo de 2007 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と 1 (b) の詩のうち、どちらか一つ選んで解説しなさい。

1 (a)

しかし、どれだけ歩いても、周囲の様子に変化はなかつた。木々は私に無関心にただ立ち並び続け、僅かな傾斜はあつたが、地面にはどこまでも土と落ち葉が広がっていた。同じ場所をぐるぐると歩いているように、その不变は氣味が悪く、少しずつ私を動搖させた。どこまでも広がる、無機質な、木々の羅列。私を囲い、その中に封じ込めるように、まるで全て計算されているかのような、空に伸びる直線の連續。足に痛みを感じ、全身に汗が滲んだ。だが、一度風が吹くと、周囲の様子は一変した。空気を裂くような轟きの中、全ての木々が揺れ始めた。暗闇の中でうごめくその葉の茂りの集合は、一つの巨大な生物のように迫り、叫ぶような轟音で歌しながら私の方へと襲いかかるように思えた。恐怖に足がくすみ、その度に歩くことができなくなつた。落ちていた太い木の枝を拾い上げ、力を込めて握りしめた。とにかく、同じ方向に歩き続けなければならぬと思った。その方向が間違つていたとしても、私にはそういうことしかできなかつた。

目の前に動く影を見た時、全身が痙攣するような恐怖に、息ができなくなつた。私の胸ほどの高さの生き物が二つ、少しずつ、少しずつ、私に向かつて動いてきた。野犬だった。飼い犬とは明らかに違う、太い、濁りのある鳴き声を上げ、その飢えを主張する荒く湿り気のある呼吸は、私のどんな行為も通用しないことを明らかに示していた。私は、絶望を感じた。自分の身体がどこまでも、下へ下へと落ちていくようだつた。私が食料をもつていないと、彼らとは、彼らの狙いは、私自身に違いかつた。そういうことなのか、と私は思った。結局自分はこうなる運命であり、あの狭い部屋から抜け出ることができたとしても、私は周囲を、常にこういった障害に囲まれ続けているのだと思った。走る力は、もうなかつた。彼らは少しずつ、私との距離を縮め続けていた。

だがその時、大きな感情が私の中で動いた。それは自分には似つかわしくない、狂暴な、荒々しい力の渦のようだつた。突然芽生えたそのうねりは、驚いている私を凌駕するように全てを支配し、気がつくと、声を失っていたはずの私は、身体の底から噴き出るような叫び声を上げていた。あの時、私は犬に向かつて叫んだのではなかつた。犬の向こう側にあるもの、私を痛めつけた彼らの、さらに向こう側にあるもの、この世界の、目に見えない暗闇の奥に確かに存在する、暴力的に人間や生物を支配しようとする運命というものに対して、そして、力のな

30

いものに対し、圧倒的な力を行使しようとする、全ての存在に対して、私は叫んでいた。私は、生きるのだ。お前らの思い通りに、なつてたまるか。言うことを聞くつもりはない。私は自由に、自分に降りかかる全ての障害を、自分の手で叩き潰してやるのだ。

35

私は握っていた木の棒を両手で握りしめ、犬に向かつて飛びかかった。ありつたけの力を込めて、泣き声とも、威嚇の声とも区別のつかない叫び声をあげながら、狙いもわからないままに振り降ろした。鈍い振動が両腕に走り、手放したくなる渾れに耐えながらもう一度、さらにもう一度と、棒を振り回し続けた。後方で唸り声を聞いた瞬間、そちらに向かつて棒を振り上げた。できるだけ身体が大きく見えるように両腕^{わき}を上げながら、相手よりも早く動かなければならぬと思つた。決して、躊躇^{ちゅうちょ}してはならなかつた。私の一撃は当たらなかつたが、犬が、背を向けて駆けていくのがわかつた。私はなおも叫び声をあげ、勢いのままに棒を振り回し、追いかけようとした。犬が逃げていくのを見ながら、全身の力が抜け、その場に座り込みそうになつたが我慢して歩いた。まだ、周囲の風景に変化はなかつた。じこまでも続く木々の羅列は、なおも私に無関心に、ただ静寂を保つていた。

45

それから、どれだけ歩いたかわからぬ。幾つの傾斜を越え、幾つの水溜りを飲み、幾つの木々の間を通り抜けた。周囲が段々と青く、うつすらとした光に照らされ始めた時、自分が、しばらく太陽の光を浴びていないと気がついた。頭がぼんやりとし、自分が照らされていく感覚の中で、その場に倒れ込んだ。光は暖かく、柔らかく、徐々に冷え始めていた空気に温度を吹き込もうとしていた。目を閉じると瞼の裏がうつすらと青く、暖かな土の匂いがした。私の記憶は、そこで途切れた。

やがて私は、散策に来ていた中年の夫婦に見つけられ、病院に運ばれた。

(中村文則『土の中の子供』一〇〇五年)

1 (b)

声

広やかな河口に
あふれる水
瞼のうえに
夜明けがおどずれる

5

あけぼのの
予兆のなかを
岸辺の川波をくぐりぬけて
白魚たちが
産卵のために泳ぎつく朝
10 透明なその身の丈三寸のうちを
時代の汚れが通りぬける

10

心臓も歌え
ユキヤナギが震えながら
花びらを散らすように
15 奏楽のよつにしてひとつの諧調へ向かつて
身をふるわせ

15

ゆたかにふくれる川の水
小さな叫びとともに土地から土地へ
生命も運ばれてゆく
20 もし太陽がどんより垂れかかることがあつても
川面の水のつよい張りが
水平線を支える

20

水は
あふれこぼれるのではなく
休むのでもなく
25 不可逆の軌道にそつて 人びとの体内をも流れ
往くものに

絶対自由へ
跳べ とおしえる

30 一本の竹にしても 地球の脈搏を
短くも長くもなく關節のなかでひびかせている

35 すべてはかすかな声だが
声も
傷つきやすく
ふくらみ 血も吐き
産む

40 その開ける裂け目から
閉じていた門はひらくのか
おそらく
世界の傷口に
かさなる傷

(田中清高 「声」 一〇〇六年)

シラカボ
白魚

主に海水と淡水の混じり合う汽水域に生息するが、早春には遡行そこう
して泥砂の多い河口などに産卵し、一年で寿命を終える。